札幌大学総合研究　第 6 号（2015 年 3 月）

〈三大学院共同シンポジウム〉

第13回　三大学院共同シンポジウム

テーマ「六次産業化の試み
－北海道のワイン・鹿児島の焼酎・沖縄の泡盛」

日　時　　平成 26 年 12 月 6 日（土）　13：30 ～ 17：30

会　場　　札幌大学 1 号館 2 階 1223 教室（第 5 会議室）

プログラム

【総合司会】札幌大学女子短期大学部
教授　松本　源太郎

13:30 ～ 13:40	開催校挨拶	札幌大学 学　長　桑　原　真　人
13:40 ～ 13:50	問題開示	札幌大学女子短期大学部 教　授　松　本　源太郎
13:50 ～ 14:20	報告①	「沖縄における泡盛産業と地域振興 ～酒税減免措置と経済効果の分析～」 沖縄国際大学大学院　地域産業研究科 教　授　前　泊　博　盛
14:20 ～ 14:50	報告②	「農商工連携モデル「鹿児島の焼酎産業」の発展と課題」 鹿児島国際大学大学院　経済学研究科 教　授　大久保　幸　夫
14:50 ～ 15:00	休憩	
15:00 ～ 15:30	報告③	「何故税金で，高級レストランを創るのか？ ――地域型社会的企業創出の必要性」 （株）KITABA 相談役　東　村　有　三
15:30 ～ 16:00	報告④	「北海道のワイン産業における集積 －余市を日本のナパに」 札幌大学地域共創学群 准教授　武　者　加　苗

16:00 ～ 16:10	休憩	
16:10 ～ 17:30	ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ	司　会 札幌大学女子短期大学部 教　授　松　本　源太郎
17:30	閉会の挨拶	札幌大学附属総合研究所 所　長　山　﨑　眞紀子

シンポジウム

司会　札幌大学女子短期大学部教授　松本　源太郎

開催挨拶　札幌大学学長　桑原　真人

司会：皆様寒いところお集まりいただきましてありがとうございます。

それではこれから，第 13 回三大学院共同シンポジウムを開催させていただきます。

私は, 司会進行役を務めさせていただきます松本といいます。よろしくお願いいたします。

最初に，今日のスピーカーを簡単に紹介しておきたいと思います。

まず主催者であります札幌大学附属総合研究所の所長の山崎です。

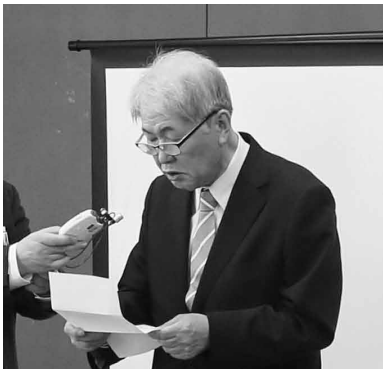
学長の桑原でございます。

それから喋る順番にご紹介させていただきますけれども，沖縄国際大学から来ていらっしゃいました前泊先生です。

鹿児島国際大学からいらっしゃいました大久保先生です。

それから株式会社 KITABA の相談役でいらっしゃいます東村 有三さんです。

本学の武者でございます。



それでは，最初に大学を代表いたしまして，桑原学長からご挨拶いたします。

桑原：皆さんこんにちは。

本日，第13回三大学院共同シンポジウムの開催を無事迎えることができまして，誠に感慨深いものがございます。

この三大学院共同シンポジウムは，平成13年4月，札幌大学大学院経済学研究科地域経済政策専攻の設置と共に始まりました。

札幌大学は，地方にある経済系の研究科が果たすべき役割として，地域経済社会への貢献を重視いたしました。

当時，地域経済政策を専攻の目的に掲げた研究科は，沖縄国際大学と鹿児島国際大学のみであり，これらの先輩研究科とネットワークを作り，我が国の周辺地域から日本社会の在り方を再考しようと考えました。

札幌大学大学院経済学研究科の初代研究科長は，本日会場にお越しの黒柳 俊雄先生で，師弟関係にある渡久地 朝明先生が沖縄国際大学におられたことで，提携関係がスタートいたしました。

黒柳研究科長の後を継いだ石坂昭雄先生を始め，当時，この提携に貢献くださった各大学院研究科の先生方につきましては，ご紹介を省略させていただきますが，こうした諸先輩のご苦労には深く感謝申し上げるところです。

そして，平成13年より，毎年一度も欠かすことなくこの共同シンポジウムを通して三大学院の研究者が興味深い報告を行い，討論を交わし続けることが出来たことを，私は大変誇らしく思います。また，10周年を記念して，選りすぐりの報告を一つの研究書にまとめることができました。これも大変大きな誇りであると，誇らしく思う次第です。

今後は，更なる成果に結びつけることが出来るよう，各地域の研究者が，地方の復活と再生の研究に邁進しなければならないと，決意を固くする次第です。

今年度は，これら3地域の特産物であるアルコールを共通テーマにしていただいたことは，大変嬉しく興味のあるところです。

本日のシンポジウムが，地方を復活させるエネルギーを生み出すことを祈念して，私の挨拶に代えさせていただきます。

最後になりましたけれども，沖縄と鹿児島の方々には，札幌の雪景色をお見せすることが出来なくて大変残念です。雪を見たい方は，ちょっと近隣の小樽まで足を伸ばしていただければ，30cmほど雪が降っています。鹿児島の桜島に雪が降って，札幌に雪がない景色って珍しいと思いますが，今後共どうぞよろしくお願いいたします。

問題開示

札幌大学女子短期大学部教授　松本　源太郎

司会：ありがとうございました。

それでは，私が，イントロダクションとして，最初のお話を10分ほどさせていただきます。

まず忘れないようにご連絡いたします。皆さんの手元に，既にプログラム等の資料があると思いますけれども，各スピーカーの持ち時間は一応30分，二人ずつまとめて30分30分で話していただきまして，そして10分ほどの休憩をはさみたいと思います。4人目が終わりましたらまた短い休憩をはさみまして，4人の方がこの前に出てらっしゃいまして，ディスカッションというふうになると思います。ですからお聞きの皆様，それから実際にお話されていない他のスピーカーの方々も発表者の内容をお聞きになって疑問や批判，あるいは同意する意見等を，ここに挟んでおります質問票にまとめていただければ4人目が終わった時点で私共の方で回収させていただいて，それをもとにパネルディスカッションが始まる，こういうふうな段取りを考えております。17時30分を終了予定としておりますのでご協力ください。

それでは本来のイントロダクションを述べさせていただきます。今，桑原学長からもお話があったことと若干重なるところがありますけどもお許しください。

私の手元には第1回からのテーマがあるんです。ちょっと読ませていただきます。

第1回はですね，地域経済の阻害要因とその展望。2回目，地域経済の活性化と関係主体。3回目，地域づくりを考える。4回目，地域開発と環境問題。5回，構造改革と地域社会。6回，グローバル時代の地域経済。7回，地域づくりの実態と課題。副題といたしまして，地域での取り組み経過をふまえて。8回ですね，地域づくりPart3となっております。経済不況と地域再生を目ざして，が副題です。9回目，歴史に学ぶ地域経済。10回目，これが先ほど桑原先生がお話された，出版を記念した年でありますけれども，地域経済における金融の役割。第11回目，産業政策と地域振興。第12回目，地域再生を考える。それで本日は三大学院共同シンポジウムのテーマとして，六次産業化の試み。これも要するに地方に，

地域における六次産業化の試みということであります。ですからお分かりのように，1回から12回，そして今年を通じて共通しているキーワードは「地域」であります。既にお気づきのように，あるいは桑原先生のお話のように，このシンポジウムはそれぞれ日本の端に立地する三つの大学院が共同してそれぞれの抱える問題の共通点，あるいは特異な点等を議論し合ってこれからの活性化に活かそうというのが骨子であります。

この端ではありますけれども，実は江戸以前の時代にもこの「端」がですね，他の外国との「橋」になった。はしづくしではありませんけれども，たしかにボーダーとしての端ではありましたけれども，我々の住んでる地域はブリッジとしての橋の役割も果たしたという，こういうような理解でいいのかというふうに思っております。

先ほど言いましたように，10年目には一つの大きな本にまとめることができまして，これは大きな成果ではあります。これは先ほど会議して確認したところですけれども，これは成果ではありますけれどもまた次の新たなステップアップのためのスタートラインについた，こういう認識です。一昨年，昨年，そして今年とですね，このように考えてシンポジウムを開催しているところであります。

ところで社会的には人口減少とか高齢化によって，限界集落とかあるいは消滅自治体という言葉が世間を飛び交っております。地方は益々困窮しつつあるという認識が広まっているように感じています。確かにデータを見る限り，あるいは我々が実感しているようにですね，地方の大学の定員割れなどを目にいたしますと，地方というのは，環境は確かに厳しくなっていると。これからもそうなるということに間違いはないと思います。では地方に生きていてですね，地方を愛する我々がそのような大きな流れにただ身を委ねていいか，決してそんなことはございません。個人の利益を求めて，愛する地域・地方を捨てて雇用機会やあるいは利潤機会を求めて大都市に移動する，移住するということがよいかというと，決してそんなことはないだろうというのが我々の共通の問題意識であります。

北海道では，度々話題になります積雪という問題があります。鹿児島や沖縄では離島という問題があります。それぞれ日本の都市部では考えられない地域社会を維持する大きなコスト，ですね，これをどうするか，どのような負担のあり方がありえるのかということがこれからのもっともっと大きな問題として差し迫って考えなければならないことだというふうに考えています。

ところで新古典派の経済理論ではですね，地域が衰退する，そうすると地域，地方から都市部へ人口が移動する。そうすると地方の一人当たりの限界生産力は上昇して，人々が多くなった都市の限界生産力は逓減し低下するから，やがてどこかで地方と都市部と賃金水準であるとか，あるいは利益や生産性であるといったものが均衡するんだ，こういう理

解があるわけであります。しかしこれは現実的でもありませんし，大きな誤った仮説だというふうに我々は認識しているわけであります。実際には，地方の生産性の高い部分，若い人材から先に流出していく。後に残された地域経済が一層衰退していく，というのを我々は目の当たりにして経験しているところであります。ですから先ほど言いましたように，都市から地方へ何かの再分配を含めたメカニズムが必要だということになろうかと思います。

では再分配のメカニズムが今の日本にあるようないわゆる補助，補助金のシステムでいいかというと，そう簡単な話ではありません。それに頼ってはいけないというのも，また我々の共通した認識であろうというふうに思っております。ですから最近よく言われますように，自助，共助，公助，こういったもののバランスを念頭に置いてですね，特に地域では自助や共助といったものを主体にして地域の活性化に取り込んでいくというのが我々のあるべき姿ではないかということです。この観点から，今日の「六次産業化の試み」というテーマに行き着いたというふうに理解していただければ有り難い。六次産業というのは既にお分かりのように，一次・二次・三次産業それぞれを足して六になるという意味ではないわけであります。1かける2，それかける3，1かける2かける3，それぞれもっと強い結びつき，有機的と言ってもいいような横断的な結びつきがあって生産と雇用とそして暮らしというものが結びついて，地域らしい，地方らしい生活の在り方を模索できる。そこで真の豊かさを追求できる。そういうような成熟社会における生活の仕方まで，あるいは在り方まで，あるいはもっと言えば望ましい生活の仕方まで含めて考えるのが，この六次産業化への模索，試みというものに込められているある種の希望，理念であります。そのような観点で私は今日のシンポジウムを大変楽しみにしております。

これから三大学のパネリストがそれぞれ地域におけるお酒，酒造産業あるいは酒類業界と呼ぶんでしょうか，それらを切り口にして地域経済について報告いたします。特にゲストスピーカーとしてお招きした東村有三さんはですね，北海道における地域ビジネスのプロデューサーとして大変な名高い方です。私が存じ上げているのは地域ビジネスの立ち上げに際しての，特に行政との関わり方です。これに媚びることなくですね，むしろ辛口の，非常にはっきりした立ち位置から地域のビジネスを，地域の暮らしや風土と連携させて創造すると，このような取り組みをされている方です。東村さんのお話を含めてですね，きっと参加の皆様に有為な知見がもたらされるというふうに期待しております。

以上拙いイントロダクションを述べさせていただきましたけれども，早速，一人目のスピーカーからお話を聞くことになります。

それでは最初に，「沖縄における泡盛産業と地域振興～酒税減免措置と経済効果の分析～」というテーマで沖縄国際大学の前泊先生にお話をいただきます。お願いします。